

卒業式辞

この春に、社会人として広く世界に旅立つ卒業生、大学院修了生の皆さん、また、これから何年間か、さらなる学究の意欲に燃えて進学の道に入られる皆さん、それぞれの新しい旅立ちにあたり、一言、餞の言葉を述べさせていただきます。

私をはじめに申し上げたいことは、今日のこのよき日も、それぞれの長い人生における一つの節目にすぎないということ。五年後の三月、いや、来年の三月にも、皆さんは、きつと今のこの喜びに満ちた瞬間を、今の心もちとは異なる冷静な思いで振り返ることでしょう。どうか、そのときに、私からお届けするささやかな言葉のほんの一部分でも思い出していただければ幸いです。

私は最近、あるきつかけから、サン・テグジュペリというフランスの作家の『人間の大地』という本を読みました。今回、改めてこの本を手にし、そこに、卒業する皆さんへの餞の言葉としてふさわしい文章を発見することができました。

ご存じのように、サン・テグジュペリは、『星の王子さま』の作者として知られる軍用機パイロットですが、『人間の大地』という作品は、彼がパイロットとして得たさまざまな知見を綴るエッセー集です。その中で、私がとくに興味を持ったエピソードがありました。アンリ・ギヨメという同じフランス人パイロットが、アンデス山中で経験した墜落事故の話です。ギヨメは当時二十八歳。結婚から四か月後の出来事でした。遭難したギヨメは、零下四十度に近い寒さのなか、ありとあらゆる苦難に耐えてアンデスの山々を越え、ついに一人の少年によって救い出されます。事故から約一週間にわたる戦いでしたが、挫けそうになるたびに彼は、妻ノエルを思い浮かべ、気持ちを奮い起こしたといいます。そのギヨメが、「生きて帰る」戦いのなかで到達した一つの真理がありました。引用です。

「救いをもたらしてくれるのは、一步、歩み出すこと。一步、また一步。同じ一步をくり返すこと……」
そして彼は、こう誇らしげに回想することになります。

「ぼくは断言する、ぼくがしたことは、どんな動物もなしえなかつたはずだ」
ギヨメの戦いをつぶさに知ったサン・テグジュペリもまた、次のような貴重な発見に立ち至ります。

「人間であるということ、それはとりもなおさず、責任を持つということだ。自分のせいではないと思えていた貧困の前に、これを恥ずかしいと感じ、仲間たちが勝ち取った勝利もこれを誇りに思うこと、自分に見合った石を一つ前に積んで、世界の建設に貢献していると感じること」

「To be a man is, precisely, to be responsible. It is to feel shame at the sight of what seems to be unmerited misery. It is to take pride in a victory won by one's comrades. It is to feel, when setting one's stone, that one is contributing to the building of the world.」

この世に生を享けるということは、ある意味で不条理です。なぜなら、自分の意志でこの世に生まれ出てくるわけではないのですから。しかし、そうした不条理な生を享けつつも、人間は一人ひとりその生を真摯に受け止め、さまざまな社会的な営みをおとして人間社会を形作っています。サン・テグジュペリは考えます。この世に生を享けるということは、生を享けた者たちの共同体、平たく言えば、ネットワークに否応なく組み込まれるということであり、そこからの意図的な、あるいは弱気な離脱は、人間としての真のモラルに反する、と。いったん生を享けた以上、人間は、自分と同じ仲間である人間たちに対し、「みんなと生きていかなければならない、一緒に生きているみんなを悲しませない」という責任を負っているはず、と考へるわけですね。

アンデス山中で事故に遭遇したギヨメは、「こんなところで死んでたまるか。自分は絶対に生きて帰り、妻や同僚を安心させる」、つまり、「生きて帰る」ことが、人間として務めを果たすことであると考えました。そしてその務めを果たすために必要なことが、**「一步、歩み出すこと。一步、また一步。同じ一步をくり返すこと……」**だったのです。

ここに示されたギヨメの経験、さらにサン・テグジュペリが得た言葉を読みながら、とても大切だと思ふのは、他者そして世界に対するゆるぎない信頼です。生きてある友や仲間たちの誠意、真摯さを信じ切るという態度です。そしてその信頼の底に横たわっているのは、人間はともに生きて世界にあり、世界から孤立しては絶対に生きられないという運命共同体の意識です。この認識に立てば、もはや、同僚や仲間たちの成功を羨むことなく、これを素直に喜ぶことができるようになり、翻つて、一個の小さな石にすぎない自分が、世界にとつてはかけがえのない存在であるという自信をもつことができるのです。

サン・テグジュペリは、言外に、人間と人間社会にとつて、信頼こそがすべてと言っているかのようです。
思うに、アンデス山中でのギヨメの戦いは、現代に生きる私たちにとつてけつして無縁ではありません。今、私たちは、グローバル化という厳しい環境のなかに生きています。そのなかで見失われがちなものこそ、他者への信頼であり、他者への慈しみです。そして今、私が、卒業する皆さん一人ひとりに申し上げたいのは、皆さんが、大きな運命共同体の一員としての意識をもち、「生きて帰る責任」を自覚しながら、これからの長い人生を着実に歩み続けてほしいということです。

最後に一言、皆さんが今日別れを告げる私たちの名古屋外国語大学は、まだ歴史の浅い大学です。皆さんの活躍一つひとつが、私たちの大学の歴史を作り、その基礎を固めていくのです。どうか、名古屋外国語大学に「学んだ」、そして「卒業した」という誇りを、いつまでも大切に胸に秘め、その自覚をもって生きていてほしいと思います。そして私たち教職員一同も、皆さんが、この大学で学んでよかつた、卒業できてよかつた、と一生思っていただける大学であり続けるよう、限りなく努力を積み重ねていく心づもりです。

最後になりましたが、何より、皆さん一人ひとりのご健康とご成功、幸多き未来を祈って、学長の式辞とします。

二〇一六年三月二十二日

名古屋外国語大学長 亀山 郁夫